

介護福祉士養成の「ターミナルケア教育」に関する一考察

高橋美岐子¹⁾ 佐藤 沙織²⁾

Consideration of Terminal Care Education in Care and Welfare Education

Mikiko TAKAHASHI Saori SATO

要旨：本研究は、全国の介護技術担当教員を対象とした「介護福祉士養成におけるターミナルケア教育の現状」に関する調査結果をもとに考察したものである。

調査の結果、回答が得られた175すべてにおいて、何らかの形で「ターミナルケア教育」は実施されているが、その内容、時間数はさまざまであり、教員の授業に対する満足度は低い傾向にあった。「ターミナルケア教育」の重要性を認めながらも、現行カリキュラムにおける限界が大きいことも指摘され、この状況下で効果的授業をどう構築していくのか検討課題である。また、体系化も視野に入れた、ターミナルケア教育の充実が求められることが示唆された。

キーワード：介護福祉士、ターミナルケア、教育

Summary : This research is based on a survey result of the current situation of terminal care education in care and welfare field. The survey has revealed that among the 175 answers, terminal care education is currently administered in some ways, but it varies in its content and hours of classes. It was clarified that most of them are not quite satisfied with the present curriculum of terminal care education. It is important to suggest improvements for more effective-teaching of this subject.

Key words : care workers, terminal care, education

I. はじめに

日本におけるターミナルケアは、治癒の見込みのない「病気を持つ患者」を中心として医療分野で広がりを見せてきた。

介護福祉士は、医療行為をその役割とするものではないが、介護を取り巻く状況の変化とともに、今後、ターミナル期にある利用者に接していくことがますます多くなると考えられる。このことから、介護福祉士は、ターミナルケアに関する基礎的な知識、技術を学ぶことと共に、「生」や「死」について学習する機会を持ち、ターミナルケアへの理解を深めることが重要であると考え。したがって、今後、介護福祉士養成においては「ターミナルケア教育」の充実がなお一層求められるものと思われる。

そこで、今回、ほとんどの養成校において実施していると予測される、介護技術の内容を中心として、介護技術担当教員を対象とした調査を実施した。その結果から、介護福祉士養成における今後のターミナルケア教育について考察を試みたので報告する。

<用語の操作的定義>

ターミナルケア教育とは：介護技術、介護概論、その他の科目における「終末期の介護」「危篤時の介護」「死後の対応、介護」、「終末ケア論」「ターミナルケア論」など、「生」「死」「ターミナルケア」に関する教育内容全般をいう。

介護福祉学科 1) 助教授 2) 助手

本研究は、第9回日本介護福祉教育学会において発表したものに加筆したものである。

II. 研究方法

1. 方法：質問紙調査法（郵送法）
2. 調査期間：平成14年2月20日～3月20日
3. 調査対象：日本介護福祉士養成施設協会加盟校（高等学校は除く）の介護技術担当教員384名
4. 調査項目：1) 対象の属性（学校・学校種別、修業年限、取得資格、設置主体、対象者・・・年齢、性別、資格、教員歴）2) 各介護福祉士養成課程における「ターミナルケア教育」の概要①設定科目・単元②特別講演・講義 3) 介護技術における「ターミナルケア教育」の現状①授業時期・実習との関連②授業内容・

方法・形態③重点項目④授業評価⑤教員の授業に対する満足度⑥悩み・意見（自由記述で回答を求めたものを内容別に分類 図7）

III. 結果・考察：

1. 回収数175、回収率45.6%。
2. 対象の属性：（図1、図2、表1）

学校種別は、専門学校が約7割を占めた。対象者は、約9割が女性、約7割が看護師の資格を持つ人であった。また、年齢は、40代、50代で全体の6割以上を占め、介護福祉士の養成教育に関わってから1年未満の人が46.3%で最も多かった。

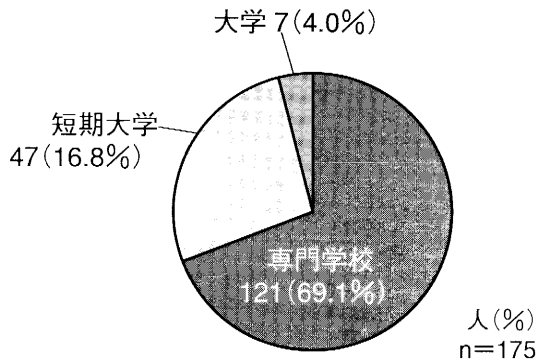


図1 学校種別

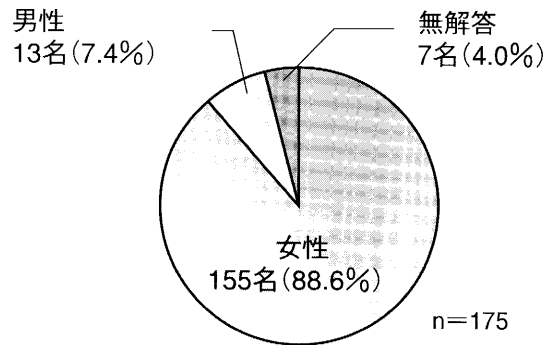


図2 回答者属性（性別）

表1-1 回答者属性(年齢) n=175

| 年齢 | 合計 (%) |
|-----------|------------|
| 1. 20～29歳 | 7名 (4.0) |
| 2. 30～39歳 | 19名 (10.9) |
| 3. 40～49歳 | 56名 (32.0) |
| 4. 50～59歳 | 59名 (33.7) |
| 5. 60～69歳 | 25名 (14.3) |
| 6. 70～79歳 | 0名 (0.0) |
| 無回答 | 9名 (5.1) |

表1-2 回答者属性(資格) n=175

| 資格種別 | 合計 (%) |
|----------|-------------|
| 1. 看護師 | 128名 (73.1) |
| 2. 介護福祉士 | 38名 (21.7) |
| 3. 教員免許 | 36名 (20.6) |
| 4. 社会福祉士 | 12名 (6.9) |
| 5. その他 | 26名 (14.9) |
| 無回答 | 7名 (4.0) |

(複数回答)

表1-3 回答者属性(教員歴) n=175

| 年数 | 合計 (%) |
|----------------|------------|
| 1. 1年未満 | 81名 (46.3) |
| 2. 1年以上～5年未満 | 66名 (37.3) |
| 3. 5年以上～10年未満 | 19名 (10.9) |
| 4. 10年以上～15年未満 | 0名 (0.0) |
| 5. 15年以上～20年未満 | 0名 (0.0) |
| 6. 20年以上～ | 0名 (0.0) |
| 無回答 | 9名 (5.5) |

< 1. 教育課程全体におけるターミナルケア教育の概要 > (図3、表2、図4)

図3で示すように、「ターミナルケア教育」に関する科目を設定している養成校は173 (98.9%) であった。

科目の種類と時間数は、表2のとおりで、設定されている科目は述べ数300、1校あたり約1.7であった。「介護技術」の一単元で実施しているところが最も多く167 (96.5%) であった。

時間的には (90分を一回に換算) 300中、244 (81.3%) が5コマ以内で、10コマ以上のところは9件 (3.0%) であった。特に、「介護技術」や「介護概論」をはじめ、科目の中の一単元として実施している科目はほとんどが5コマ以内であった。他の単元との関連で、5コマ以上確保することが無理であることは十分予測される場所である。

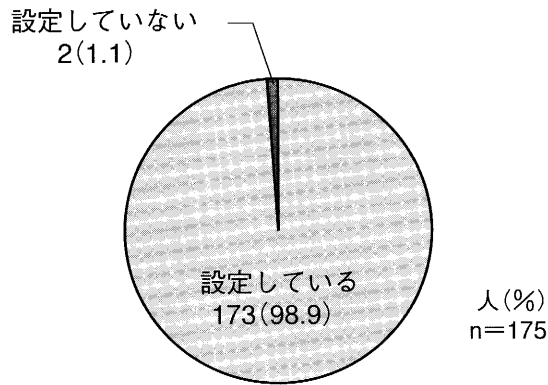


図3 ターミナルケア教育に関する科目・単元設定の有無

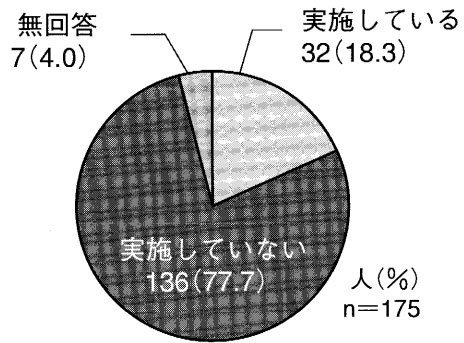


図4 特別講義・講演の実施有無

表2 「ターミナルケア教育」授業科目・時間数 90分を1コマ（1回）と換算 n=173

| 科目 | 回数 | | | | | | | 合計 (%) |
|------------|------|------|------|--------|-----|----|------------|--------|
| | 2回以内 | 3～5回 | 6～9回 | 10～14回 | 15回 | NA | | |
| 1. 介護技術 | 86 | 51 | 8 | 0 | 0 | 22 | 167 (96.5) | |
| 2. 介護概論 | 78 | 4 | 0 | 0 | 0 | 12 | 94 (54.3) | |
| 3. 倫理学・哲学 | 3 | 4 | 2 | 0 | 3 | 1 | 13 (7.5) | |
| 4. 形態別介護技術 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 (4.0) | |
| 5. 終末ケア論 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 0 | 5 (2.9) | |
| 6. 実習指導 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 (2.3) | |
| 7. 精神保健・心理 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 (1.7) | |
| 8. 社会福祉論 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 (1.2) | |
| 9. 在宅介護論 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 (1.2) | |
| 10. 医療・医学 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 (1.2) | |
| 11. 卒業研究 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 (0.6) | |
| 合計 | 183 | 61 | 11 | 3 | 6 | 36 | 300 | |

(複数回答)

自由記述（図7）では、「人体の解剖・生理の理解が基盤として必要」「利用者の状態の見極めが必要」「医学一般の授業内容の検討が必要」「死生学が必要」「哲学などの科目設定がなく不十分」などといった、他教科との関連についての意見があった。また、「介護技術」の授業で教員が授業に満足していない理由では「他教科との関連が薄い」と回答した人が21.4%であった。

ターミナルケア教育を複数の科目にわたって展開する場合の、科目間の調整や学科進捗との関連など吟味する必要があることは言うまでもない。そのことが学ぶ学生にとってわかりやすく、効果的な授業につながるものであることを認識しながら、授業目標達成へと向かいたいものである。

図4のとおり、講義以外に特別講義や特別講

演を実施している養成校は、32（19.0%）であった。科目設定されていない2校においても特別講演や講義は実施されていた。「生」や「死」について、学生が自分のこととして考えを深めることができるよう、そのきっかけを提供するという点において、特別講演や、講義は意義深いものとする。

以上の結果から、ターミナルケアに関する教育は、回答した175すべてで、何らかの形で実施されていると述べている。しかし、ターミナルケア教育の必要性を認識する一方で、現行のカリキュラムでは限界が大きいことも事実である。

介護福祉教育全体における「ターミナルケア教育」をどのように位置づけるのか、また、統合された効果的教育実践はどのようにあるべきかなど、検討課題は山積している。

表3 授業内容 n=167

| 項目 | 人数 (%) |
|-----------------------|------------|
| 1. ターミナルの概念 | 141 (84.4) |
| 2. ターミナル期にある利用者の変化・状態 | 141 (84.4) |
| 3. ターミナル期にある人への援助 | 141 (84.4) |
| 4. ターミナル期にある人への家族への援助 | 135 (80.8) |
| 5. 死後の処置 | 134 (80.2) |
| 6. 臨終時の援助 | 129 (77.2) |
| 7. 死亡時の援助 | 125 (74.9) |
| 8. その他 | 23 (13.8) |
| 無回答 | 12 (7.2) |

(複数回答)

表4 授業の方法・形態 n=167

| 項目 | 人数 (%) |
|-----------------------|------------|
| 1. 教員の斉講義 | 136 (81.4) |
| 2. ビデオ学習 | 80 (47.9) |
| 3. 学内演習 | 65 (38.9) |
| 4. グループ検討 | 62 (37.1) |
| 5. 課題学習 | 50 (30.0) |
| 6. 学生への調査 | 18 (10.8) |
| 7. 介護技術の単元としての特別講演・講義 | 7 (4.2) |
| 8. 介護技術の単元としての施設訪問 | 4 (2.4) |
| 9. 介護技術の単元としての居宅訪問 | 2 (1.2) |
| 10. その他 | 7 (4.2) |
| 無回答 | 3 (1.8) |

(複数回答)

<2. 介護技術におけるターミナルケア教育について> (表3、表4、表5、図5、図6)

1) 授業内容、方法・形態 (表3、表4)

授業内容は、回答した7割以上がほぼ共通した内容であり、大方は、斉講義のほか何らかの方法を取り入れて授業展開していることがわかる。

自由記述 (図7) では、「実体験の少ない学生に、ターミナル期にある利用者の状態をイメージさせることは困難である」「実感が伴わないと理解しづらい」「学内教育の限界を感じる」「討論の深まりがない」「生命の尊厳についての理解が難しい」など、授業の困難性についての記述が40件みられた。

教員のターミナルケア教育に対するねがいや授業の目標をどのように授業内容に盛り込み、どのような方法で展開していくのか、価値観を伴うという点において、他の教科目とは異なる

教育の難しさがある。

学生が理解困難と考えられる事柄にどう対応していくのか、検討が必要である。ターミナルケア教育における重要な点としての、「死生観」や「倫理観」などといったことに教員はどのように関わるができるのだろうか。学生が「生」や「死」について考えるきっかけをどう作り出していくのか、授業の方策が問われるところである。

自由記述では、「ひとつの単元としてのターミナルケア教育では、時間数も少なく、通り一遍の授業になりがちである。」「倫理的側面も関係するため、深い考えがもてない」「どのようにしたら学生の考え方や倫理観を高めていけるか不安」「討論の深まりがない」などとあるように、全体的には必ずしもその内容や方法は十分であるとは言い難い。

2) 授業の重点項目について (図5)

教員が何に重点をおいて授業を行っているかについて尋ねたところ、回答中「心理面の援助」が最も多く65.8%、次いで「死生観・人生観を養ってほしい」61.1%、「身体面の援助」38.9%、「介護福祉士としての姿勢を養ってほしい」38.2%であった。

しかし、自由記述 (図7) の「授業の困難性」とあわせてみると、必ずしも教員のねがいは学生に伝えられているとは言い難い。つまり、そこには理想と現実とのギャップがあるように考えられる。

学内教育において「心理面の援助」をどのように理解できるよう授業を組み立てていくのかということ、また、限られた時間の中で「死生観や人生観」をいかにして養っていくのかということが、介護福祉教育における当面の課題ともいえる。

ターミナルケアは「生きることへの支援」という視点が重要であり、利用者の「生きる」ということ、「看とり」ということにどう向き合うのか、このことが結果的に、ターミナルケアに関わる介護福祉士としての資質につながっていくものと考えられる。

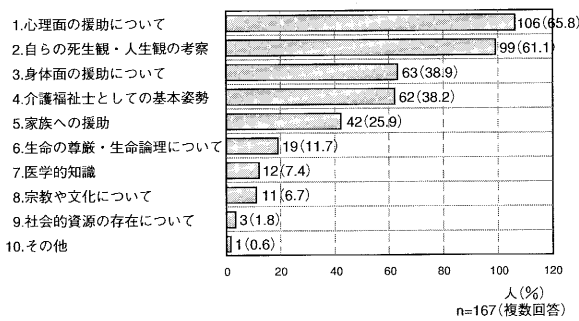


図5 授業の重点項目

3) 授業評価について (表5)

学生の理解度について「ペーパー試験」59.2%、「課題レポート」49.7%、教員自身の授業評価は「学生の声を聞く」46.7%、「行っていない」40.1%であった。

ターミナルケア教育における授業評価は、価値観を伴う部分をどのように評価するのかという点において、他の技術とは異なる難しさもちあわせているものと考えられる。

表5 授業評価

| | 項目 | 合計 (%) |
|--------|-------------------|-----------|
| 学生の理解度 | 1. ペーパー試験 | 99 (59.2) |
| | 2. 課題レポート | 83 (49.7) |
| | 3. 行っていない | 28 (16.7) |
| | 4. 自己評価 (振り返りシート) | 23 (13.7) |
| | 5. その他 | 8 (4.6) |
| | | n=167 |
| 教員の評価 | 1. 学生の声を聞く | 78 (46.7) |
| | 2. 行っていない | 67 (40.1) |
| | 3. 評価用紙への記入 | 26 (15.6) |
| | 4. 他の教員の授業参観による評価 | 10 (6.0) |
| | 5. その他 | 8 (4.8) |
| | 無回答 | 3 (1.8) |
| | | n=167 |

(複数回答)

4) 授業に対する教員の満足度について (図6)

教員が自分自身の授業に満足しているかについて、「十分満足している」「まあまあ満足している」と回答した満足群が26.3%、「あまり満足していない」「全く満足していない」と回答した不満足群は39.8%であった。また、3割近くの人が「どちらともいえない」と回答している。満足していない理由では、満足していない群70名中、「授業時間数の不足」80.0%、「ターミナルケア教育は体系化されるべき」51.4%、

「授業の準備が不十分」47.1%などが上位を占めた。自由記述 (図7) でも、「授業の困難性」や「授業の準備の不十分さ」「時間数の不足」をあげるものが多く、このことは、現行カリキュラムにおける限界を示していると読みとることもできる。

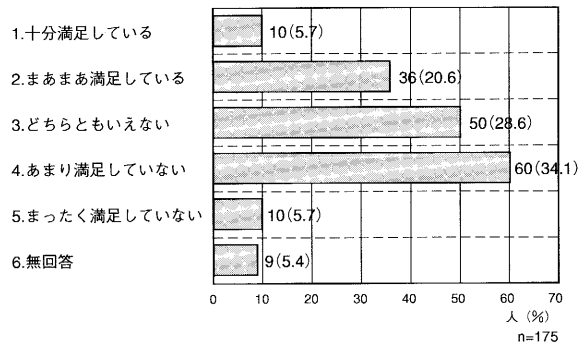


図6-1 授業に関する教員の満足度

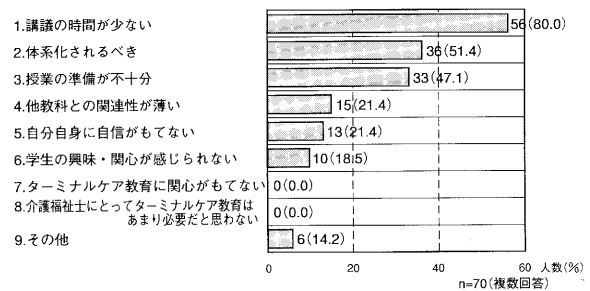


図6-2 不満の理由

以上のことから、介護福祉士養成における「ターミナルケア教育」は、各養成施設が個々に持つ問題だけではなく、全体の課題の一つとして考えていく必要性が示唆される。

また、自信を持って授業展開できていないこと等述べている人もいた。対象とした教員の年齢層や教員歴などは様々であり、「ターミナルケア」に関する体験もまた様々であると思われる。したがって、研修への参加などを通し、自己研鑽に努めることも教員としての資質を高めるうえで重要になってくると考える。

| 分 類 | | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 | 30 | 35 | 40 | |
|-------------|---------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|--|
| 実習 15 | 1. 実習の教育体制 | 6 | | | | | | | | |
| | 2. 実習体験の不足 | 4 | | | | | | | | |
| | 3. 実習の必要性 | 4 | | | | | | | | |
| | 4. 実習体験の意義 | 1 | | | | | | | | |
| 学内教育 121 | 5. 授業の困難性 | 40 | | | | | | | | |
| | 6. 授業の準備 | 23 | | | | | | | | |
| | 7. 授業内容 | 22 | | | | | | | | |
| | 8. 授業時間数の不足 | 17 | | | | | | | | |
| | 9. 教員の資質 | 11 | | | | | | | | |
| | 10. 他教科との関連 | 6 | | | | | | | | |
| 全体 46 | 11. その他 | 2 | | | | | | | | |
| | 12. ターミナルケア教育充実の必要性 | 26 | | | | | | | | |
| | 13. 教員の思い・ねがい | 17 | | | | | | | | |
| | 14. ターミナル教育の範囲など | 3 | | | | | | | | |

回答者数 86名
回答件数182

図7 ターミナルケア教育に関する意見（自由記述）

IV. まとめ

本学では、介護技術や介護概論、生命倫理、特別講演、老人の心理などの科目で人の「生」や「死」について考える機会がある。しかし、このような、いわば分断された形式での教育は、学ぶ学生側からすると効果的に構築されているのだろうかという疑問にぶつかる。

自由記述（図7）では、「ターミナルケア教育の充実」の必要性について述べている人が26名いた。また、ターミナルケア教育の重要性を認識している一方で、現在の介護福祉士養成教育カリキュラムにおいて、ターミナルケア教育の充実を求めるには無理があることを指摘している人もいた。現行のカリキュラムで「ターミナルケア教育」を体系化していくことは極めて困難である。しかし、死が遠い存在となっている現代であるからこそ必要な「体系化」であるという、教員の叫びでもあると思われる。

現在、介護福祉士としての「ターミナルケア」は、高齢者の施設や在宅、ホスピス病棟などにおいて展開されている。「ターミナルケア」における介護福祉士の役割を明確にしながら、ターミナルケア教育をどのように位置づけ、実践していくのか、介護福祉士養成全体の検討課題の一つであると認識する。

参考文献

- 1) 一番ヶ瀬康子(監)：在宅介護におけるターミナルケア，一橋出版，1999.
- 2) 岡崎陽一他(監)：高齢社会の基礎知識，中央法規，1998.
- 3) 柏木哲夫：ターミナルケアとホスピス，大阪大学出版会，2001.
- 4) 佐々木隆志：日本における終末期ケアの探求，中央法規，1997.
- 5) 高橋美岐子，佐藤沙織：ターミナルケア教育に関する一考察，介護福祉教育No.14，pp45-50，2002.
- 6) 内閣府：平成14年版高齢社会白書，財務省印刷局，2002.
- 7) 長谷川匡俊：宗教福祉論，医歯薬出版株式会社，2002.